知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

February 2020 2

歩いて探る、地名の謎 其の三 ～西浦海山、闊歩編

歩いて探る、地名の謎

其の三

～西浦海山、闊歩編

今回巡るのは常滑市の中南部に位置する
西浦北小と西浦南小の学区。
明治から昭和まで約40数年間存在した
知多郡西浦町のエリアだ。
海あり、山ありのこの地域は知られざる歴史の宝庫。
その謎を解くべく、散策に出掛けてみた。

今回の主な参考文献

『尾張国地名考』
安永5年（1776）に佐織（現あま市）に生まれた郷土史家・津田正生が幕末に執筆。尾張全域の地名の由来を考察しており、全12冊に及ぶ。大正5年（1916）に一冊にまとめて出版され、全680ページのうち約70ページが知多半島に割かれている。

『知多郡史』
昭和以前の知多半島の歴史・地理・行政・文化を網羅した地誌で、大正12年（1923）に全3巻で刊行された。発行は、明治時代後期から大正時代まで半田に置かれていた知多郡役所。

『西浦町史』
常滑市の誕生で消滅した旧知多郡西浦町の地区委員会が、町の足跡を残しておこうと郷土史の刊行を企図、西浦町史編纂委員会を組織して制作した。合併一年後の昭和30年（1955）に発刊。

西阿野・称名寺

わずか五年で消えた村名

西浦や　東浦あり日間賀島
篠島かけて　四国なるらむ

西浦の名が出てくる有名な一首だ。これは、弘仁元年（810）に知多半島に初めて上陸した弘法大師が、この地の風景が故郷の四国に似ていることに驚いたという故事にまつわる歌である。西浦は知多半島の西海岸、東浦は東海岸のこと。西浦という地名は、現在は常滑市南部のうち樽水と苅屋の間の地域を指すことが一般的で、西浦北小、西浦南小、西浦南保育園、西浦南児童館、尾張西浦郵便局にその名が見える。しかし、本来はこの歌が示すように、知多半島の伊勢湾側すべてが西浦だったのだ。なのに、なぜ常滑の一部が「西浦」なのか？まずはそこから考えてみたい。

古い書物を紐解くと、平安時代末期から鎌倉時代の頃、常滑市南部・武豊町・美浜町東部にまたがる地域に「枳豆志荘」という荘園があったという。「枳」は蜜柑のような実を付ける柑橘類の落葉低木「からたち」のこと。柑橘類は半島名物のひとつだが、昔からゆかりのある土地だったようだ。

時代が下って明治39年（1906）、樽水村・西阿野村・苅屋村・古場村（熊野と檜原を含む）の四か村が合併して新しい自治体が生まれた。この村は、中世の枳豆志荘から採って「知多郡枳豆志村」と命名された。もともと枳豆志荘は、文化風土の異なる東西両岸に跨っていたせいか、荘園が廃れるとともに地名も歴史の中に埋もれていったが、五百年以上の時を経て復活したのだ。四村は同じような規模だし、地域全体の象徴たりうる決定打的な山や川や神社仏閣などもないので、当時の人々は新しい地名を創出するのに頭を悩ましたことだろう。枳豆志村に決まったのは、おそらく地域の重鎮の中に歴史に詳しい人がいたのではないだろうか。

しかし、枳豆志の名は、発足からわずか五年後に再び消えてしまう。というのは明治44年（1911）、枳豆志村が町制施行して「知多郡西浦町」となったためだ。そのまま枳豆志町としても問題はなさそうだが、ルーツが古すぎるゆえ、村民の間に馴染まなかったのか。

当時の村議会の記録によると、名を改めた理由は「村と称し枳豆志と唱ふるは商取引上かつ呼称上に於て不利不便少なからず」（『角川日本地名大辞典23愛知県』）より引用）という。この地域は醸造、製陶、織布など工業が盛んで村外との取引も多いので、読み難くどこにあるかよくわからないような地名ではなにかと不都合だというのだ。そして「知多半島の西浦に位するに因み」（同前）、分かりやすい「西浦」の名を採用した。本来、その名が指し示す範囲が広いのは承知しながら、近隣で西浦を名乗る自治体もなかったので「これだ！」と閃いたのだろう（ちなみに同年、半島北東部の五村の合併による「知多郡東浦村」も誕生している）。

しかし、これは消極的な選択だったとは思えない。南北に長い知多半島西浦のほぼ真ん中に位置していることが、地域のリーダーたちの意識にあったと思う。周囲には独自性が強く、勢いのある町や村がひしめいているが、「わが町こそ西浦の代表たらん」という気概も感じられる町名ではないか。

かくして新生西浦は、近代という大海へ船出する。

山から垂れいずる水の恵み

西浦めぐりは、西浦で最も北に位置する樽水から始めよう。現行の町名では、本宮山麓一帯の「大字樽水」と、県道252号沿いの「樽水町1～4丁目」があるが、これに塩田町、井戸田町、泉町を加えた地域が樽水にあたる。海岸付近では常滑市街から家並が途切れなく続いており、どこが旧常滑町（保示・山方・市場・瀬木・奥条・北条＝いわゆる「旧常」）との境になるのかよくわからない。しかし県道から少し奥に入ったところにある樽水公民館・津島神社のあたりから東へ急傾斜の丘が伸びており、境界が一目瞭然だ。かつては地区南側にもゆるやかな丘陵があり、丘と丘に挟まれた谷間に家並が密集するような地形だったが、昭和後期に進められた宅地造成でかなり削られたとか。

古い書物によれば、樽水は本来「垂水」と書くそうで、二つの説が披露されている。『知多郡史』には「潮水は桶に盛られ、その下部から垂下せしめ、これを精製した」、すなわち古代の製塩の工程で「水を垂らす」ことが由来という。潮水を桶の下部から垂らしたというのは、鹹水（塩のもととなる濃い塩水）を抽出したり濾過したという意味か。今の風景からは塩作りがまったく想像できないので、この説もいまひとつピンとこない。しかし、塩田町という地名があるので、製塩が行われていたのは確かだろう。

一方『尾張地名考』には「村の東北に山あり、ここに清水ありて田方の用水とす。垂水の水源、照明なり」とある。村の奥には常滑市最高峰の本宮山（2015年7月号『常滑三名山をゆく』参照）をはじめ、半島を東西に分かつ山々が連なっている。そこから垂れ出た水が集まって川となり、山麓の水田を潤しながら村を貫流し、伊勢湾へと注いでいる。山上に展望台が設けられた本宮山

大日本帝国測量部「半田」1:50000、昭和10年発行

樽水・津島神社下を流れる樽水川

から眺めると、その説のほうがなんとなくしっくりする感じだ。

樽水の南に続くのは西阿野。現行地名は「大字西阿野」と「阿野町1～6丁目」および唐崎町がその区域になる。10月号『常滑井戸筒談義』で取り上げた久田窯や、12月号『やきもの散歩道Mコース』の終点に設定したジャニス工業の所在地でもあり、西浦の中ではどちらかというと窯業色が濃い。東阿野がないのに「西」阿野というのは奇妙だが、これは豊明市の阿野（旧名は東阿野）が明治時代の中ごろまでは知多郡に属しており、それに対応したもの。

西阿野も樽水と同様に、二つの説が記されている。『尾張地名考』ではシンプルに「青野」を意味するとある。草が生い茂る青々とした土地という意味か。

かたや『尾張地名考』の記述はこうだ。南北朝時代、近江の園城寺（三井寺、滋賀県大津市）が戦火に遭って焼失したとき、足利尊氏が再建を支援した。尊氏と関係のあった荘園に、鎌倉時代から良質な檜の産出地として知られていた枳豆志荘があり、ここで伐採した檜を園城寺に建材として寄進した。そして「阿野は園城寺の衆徒（宗徒）を指せる語である」と書かれている。これは、園城寺から檜の伐採・運搬のために派遣された阿野一党がそのままこの地にいついた、とでも解釈すればいいのだろうか。

この件に関する文書や学術研究の成果は今のところ見当たらず、本誌ではこれ以上言及しようがない。誰か謎解きに挑戦していただけないだろうか。

熊野の神に見守られて

樽水と西阿野は西浦北小学校の学区で、これより先は西浦南小学校の学区になる。

西浦の中でもっとも面積が小さいのが熊野である。伊勢湾と低い丘に挟まれた狭い平地に、身を寄せ合うようにして家々が集まっている。防波堤に遮られて海面が見えないが、かつては穏やかに波が打ち寄せる砂浜に面して家々が点在し、まるで民話の舞台のような村だったはずだ。

その熊野のほぼ真ん中に熊野神社がある。地名はここから来たものだろう。境内はそれほど広くはないが、どこか開放感があり南国めいた風情も漂っている。近隣の神社の多くが山ぎわや丘の上にあるのに対し、ここは平たい土地であるからだろう。

境内の由緒書によると、熊野神社は宝亀2年（771）に紀州熊野より勧請されたとある。ただし最初に祀られたのは、3キロほど南へ下った大谷の高坂山で、ここに遷座されたのは室町時代の宝徳元年（1449）。「西枳豆志荘九か村（樽水以南の常滑市域）」の総社として崇拝されたというから、この地こそが西浦の中心と言えよう。

大谷の高坂山とは、本誌2015年7月号『常滑三名山をゆく』でも取りあげた高砂山のことだろう。高砂山には、龍神がもたらした面を被って雨乞いをしたとの伝説があるが、その面はどうやら熊野神社とともに移されたらしい。『西浦町史』には、熊野神社の解説として「神社に古くより伝わる古神面を海上沖合に奉與して祈雨すれば忽ち瑞雨降下して五穀成熟する」と記されている。水不足に悩まされてきたこの地域の人々の頼みの綱、心のより所でもあったのだろう。

熊野が西浦の精神的な中心とするならば、続く古場は行政の中心である。知多郡西浦町役場は古場に置かれていた。場所は県道252号沿いの安養寺の付近。そのすぐ東の丘の上に「山ノ神平和の丘」と名付けられた小公園があり、その一角に「西浦町道路元標」と刻まれた石柱が建っている（表紙写真）。道路元標は、距離測定の基準標石として大正時代に制定された道路法に基づき設置されたもの。もとは役場前に建てられていたと思われ、西浦町時代の数少ない遺物のひとつだ。

古場の有名どころといえば、県道沿いに大きな木造の蔵が建つ「白老」の澤田酒造が真っ先に挙げられるが、かつては他に「鳳翔」の滝田酒造、「玉の輿」の後藤酒造もあり、酒どころ知多半島の一翼を担っていた。江戸時代、廻船に積まれた酒は江戸へと運ばれて人気を博したという。

ここから運び出されたのは酒だけではなかったらしい。枳豆志荘は良質な檜の産出地だったと先述したが、『知多郡史』には、古場のもとの字は「木場」で、山から切り出して木材を船に積み込むまでの置き場だったことが由来、と書かれている。古場は、外の世界への入口だったのだ。

ため池のほとりで昔を思う

境川という小さな川を挟んで古場と向かい合うのは苅屋である。いにしえの古場には船着き場があったが、苅屋には今も漁港があり、西浦地区の漁業基地となっている。『西浦町史』によると苅屋は古くから漁業が盛んな土地で、明治の頃から漁業者が年々増加し、発展の一途を辿ったという。夏場には伊勢湾の北部に位置する朝倉（現知多市）、横須賀（現東海市）、下之一色（現名古屋市港区）、蟹江などの漁師の小舟が苅屋の港に多数停泊し、ここにあった魚市場で地元の漁師とともに魚をセリに出していたとか。

古場・山ノ神平和の丘付近からの眺め

苅屋漁港

本宮山展望台から樽水、西阿野を望む

熊野神社

苅屋の名は『西浦町史』によると、建久元年（1190）に源頼朝がこの地に仮屋（一時的な陣屋）を設けたという伝説があり、それが地名の由来であるという。この年に頼朝が知多半島にやってきたのは、かつて野間で謀殺された父・源義朝の菩提を弔うために大御堂寺へ参拝するのが目的だった（2019年8月号『野間大坊いまむかし』参照）。

最後は、苅屋と古場の間に流れる境川をさかのぼり、内陸の集落である桧原へ。町名としての正式表記は「桧」の字を使うが、元は旧字で「檜原」と書いた。先ほどからたびたび枳豆志荘は檜の産地だと書いてきたが、その場所こそ檜原である。とはいうものの、檜の村だったのは遥か昔のこと。今はどこを見回しても檜などない。伐採しすぎて消滅してしまったのであろう。『知多郡史』によると、鎌倉時代に檜が生い茂る山の中にきこりが住み着き、やがて人が増えて村へと発展したという。

古い地図を見ると、一帯は木々が繁る丘陵地で、古場・苅屋からも、武豊の市街地からも離れて孤立し、少し寂しい村だったのではないかと想像してしまう。しかし、今は丘もかなり開かれ、TOTOサニテクノや隣接する武豊町域に杉江製陶といった大きな工場があり、地区を横断する県道269号は交通量も多く、そんな雰囲気は微塵もない。

桧原には山の自然を楽しめる桧原公園もあるが（2018年1月号『プレイランド・ミステリー・ツアー』参照）、どちらかというと山よりも、県道沿いで満面と水をたたえる檜原大池の印象が強いという人も多いのではないだろうか。常滑市では金山の前山池に次ぐ大きな池で、知多半島でも五指に入る。築造されたのは江戸時代初期の寛文年間（1661～73）。『西浦町史』には本宮山、高讃寺、古場の多賀神社とともに名所として紹介されている。曰く、「この池は古代、烏帽子池と称し（中略）毎年多数の鯉を養殖し、愛釣者の豊漁池である。春と初夏には釣りの人出多く、休日の慰労ができる有名な大池である」。

池のほとりから改めて池を眺めると、そのゆったりした大きさに心が軽くなる気がする。ただ、まだ風は冷たい。池の南側には桜も植樹されているので、散策するなら春まで待った方がいいかもしれない。

海あり山あり、川あり町あり。
「西浦の中の西浦」に人の歩みあり。

〈参考文献〉尾張国地名考／知多郡史／西浦町史／角川地名辞典23 愛知県／樽水のむかし（樽水歴史研究会）／西阿野懐古（久田光文）

檜原大池